

傘

河原崎碧依

雨音

僕は耳で聞いている

目蓋が閉じていて

前が見えない

僕の左手が右の腕にふれている

焦燥

乾いたくちびるを

僕はうごかすことができる

ということを考えている

僕の背中のずっとうしろにある

玄関

だれかの忘れ物のように僕の傘がある